論文の内容の要旨

論文題目　自閉スペクトラム症の描画表現に関する臨床心理学的研究
　　―自己理解と他者関係への影響に着目して―

氏名　石川 千春

本論文は，自閉スペクトラム症（以下，ASD とする）の人の描画表現による自己表現に着目し，その主観的体験から自己理解や他者関係に関する支援方策を探索するものである。全 5 部から構成される。

第Ⅰ部 自閉スペクトラム症の描画表現に関する概観と自己との関連

第 1 章 描画表現に関する概観と展望　ASD 者は社会的コミュニケーションや対人的相互作用の障害（American Psychiatric Association, 2013; 髙橋・大野監訳, 2014）があることから，自己理解や他者との関係に関して困難を抱える。描画表現はイメージを外在化することで自己を意識的に検討できるとされ（Wilson, 1985），自己理解が促進される可能性が示唆される（藤中, 2010）。ASD への従来の支援では般化の問題などが指摘され（加藤, 2019），ASD 者の内的世界に着目して，イメージを外在化させる描画表現を活用することが考えられる。ASD への描画の効果として，感情面の効果（Martin, 2009），自己肯定感の向上（Schweizer, Knorth & Spreen, 2014），自己認識の変化（Elkis-Abuhoff, 2008）が知られる。描画者が世界をどのように捉えているかという知覚的意味を明らかにする（Merleau-Ponty, 1969）描画表現の自己への効果が考えられる。

第 2 章 自閉スペクトラム症における自己理解　ASD においては，自己に対してトップダウン機能が不在の「空白の自己」が論じられ（Frith, 2003），自己理解ができていないために仕事で困難が生じる事例が多い（梅永, 2017）。先行研究の発展（Damon & Hart, 1988; 滝吉・田中, 2011）から，自己理解は「身体（外的属性）・行動・人格特性の 3 側面を含む，他者と区別するために認識される自己に対する考え」と定義される。ASD 者が自己理解を促進するためには，社交不安を軽減して他者参照能力を高めることが必要とされる（高岡, 2017）が，社会的相互作用に困難を抱える ASD 者にとって，社交不安を軽減して他者参照能力を伸ばすことは容易ではない。自分の興味について関心をもって扱われることで自己感覚をより良く保つと論じられ（辻井, 1999），興味関心を映し出す描画表現は，その内的世界を共有するツールとなりうることが考えられる。

第 3 章　本研究の目的と構成　そこで本論文では，描画表現を通して，ASD 者の自己理解支援の発展に寄与する知見を提示することを目的とした。具体的には，以下の 3 つを目的とした。

目的① 描画表現を行う ASD 者の内的経験について，他者関係や自己をどう捉えているかを明らかにする。
目的② 新たに描画表現を行うことを通して，他者との相互作用や自己理解への影響について検討する。
目的③ 描画表現を介したコミュニティにおける他者との相互作用に着目し，どのような自己への影響がみられるかを明らかにする。

第Ⅱ部 自閉スペクトラム症者の描画表現を通した主観的体験

第 4 章 自閉スペクトラム症者の描画表現による主観的体験（研究 1）　目的①について，描画表現を行う ASD 者の語りから仮説を導出する。描画表現の体験とその過程においてどのように自己理解へとつながるかを解明することを目的に，日常的に描画表現を行う ASD 者 11 名に対し，半構造化面接を行った。分析にはグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Corbin & Strauss, 2008; 操・森岡訳, 2012）を用いた結果，【感情体験】【外的体験】【内面の深まり】という 3 つの段階を経て自己理解へと至る可能性が明らかとなった。その過程においては，他者交流の増加が重要な要素であり，他者参照能力や自己理解が促進されることが示唆された。

第５章 描画表現を長年行う自閉スペクトラム症者の自己の語り（研究２） 研究２では，長年描画を行う一人の ASD 者に対し，どのような自己の理解がなされているかについて５回のインタビュー調査を含む事例研究を行った。現象学的分析（van Manen, 1997）により，文脈に即して意味を探究し，内的な経験の構造をとらえようと試みた。分析の結果，［不自由で生きづらい自己］［自由な世界との出会い］［ありのままの自己表現］［ギリギリの局面からの救い］［社会的な受け入れ］［描画表現を通した自己形成］という６つのテーマが生成された。これらのテーマをつなぐ本質的なメインテーマとして【自己を生かす】が経験の中核にあると見出された。生きづらさを抱え自分を出せなかった ASD 者が，ありのままの自己表現を行って苦境から自己を救い出す。作品を通して他者から受け入れられ，自己形成の感覚を得ているという，自己を生かす構造が示された。

第Ⅲ部 描画法と PAC 分析を用いた自閉スペクトラム症者の自己の探索

第６章　描画法と PAC 分析による自己理解の検討（研究３） 目的②について，描画表現を行っていない ASD 者に対し，描画表現を体験することを通して，どのような自己理解の変化がみられるかを明らかにすることを目的とした。ASD 者９名に対し，自分描画法（小山, 2016）を参考に絵を描いてもらい，PAC 分析（内藤, 1997）によって絵に関する語りを得た。語りのデータを KJ 法（川喜田, 1986）により分析し，【描画による自己表現】【否定的な自己イメージ】【他者関係で生きづらさを抱える自己】【絵に映し出される自己の関心と状態】【自己の特徴と新たな発見】という大カテゴリが生成された。自己の肯定的な要素の発見がなされたことで，描画表現と語りを通して新たな自己への理解につながる可能性が示唆された。Kessler Psychological Distress Scale 日本版（K6; Furukawa et al., 2008）は描画後に有意に低下し，精神的健康度の向上が推察された。

第７章　自己理解に相違性が見られた二事例の語りの比較（研究４） 研究３の結果を踏まえ，個々の語りの変遷について抽出することが必要とみられた。自己理解言及数が post で増加した者（F）と減少した者（E）を対象に比較検討を行い，ASD 者の内的な変化について明らかにすることを目的とした。描画表現から検討される自己については，F は「昔から根付く暗い自己」と「状況によって被り変える仮面としての明るい自己」という二面性を見出した。E については，「細部にまでこだわる」自己の特性を仕事でも活かせることを見出した。自己理解言及の変化は，F が感情面について自己の認識を深め自己理解のバリエーションが増加したのに対し，E においては現実的な自己を捉える一方，感情面に関する変化はみられないという違いが示された。

第８章　描画表現の繰り返しによる自己の探索についての事例研究（研究５）　自分描画法と PAC 分析を用いた語りの分析を３セット繰り返す縦断的な事例研究を行った。20 代の女性に対し７回の調査を実施し，描画表現を繰り返すことを通して，どのように自己を探索し気づきを得るかを明らかにすることを目的とした。第１セットでは，悩みが明確化された。第２セットでは，「感情を本当は大切にしている」という自己への気づきがみられた。第３セットでは絵がカラフルになり，感情を肯定的に受け止め，他者交流の増加，理不尽なことも乗り切る認知面の変化が示された。自己の感情を深く覗くことで自己への理解を深めたことが示唆された。

第Ⅳ部　ICT 活用の描画コミュニティを介した自閉スペクトラム症者の自己

第９章　描画コミュニティにおける自己表現―他者関係に着目した実践的研究―（研究６）

目的③の「描画表現を介したコミュニティにおける他者との相互作用に着目し，どのような自己への影響があるかを明らかにする」ために，描画コミュニティにおける実践的研究を行い，他者との相互作用と自己への影響を明らかにした。ASD 者 11 名が，描画アプリによる描画表現を研究協力者限定の SNS で公表し，コメントをやりとりした。調査終了後，アンケート調査を実施した。また，pre/post に，K6，主観的幸福感尺度（伊藤他, 2003; 小島, 2018），自尊感情尺度（小島・納富, 2013）の質問紙調査を実施した。69 の描画が公表され，692 のコメントが記載された。コメントの内容からは相互作用が示され，アンケートでは「作品に対して意見を表明するというタイプのコミュニケーション経験」と，肯定的な意見が示された。統計分析はいずれも有意差は示されなかった。描画を介して他者への関心を高め，相互作用が可能となることが示された。

第 10 章　描画コミュニティ体験を通した自己への気づき（研究７）　研究 7 では，研究 6 での描画表現の体験について，他者との相互作用は ASD 者の自己に何をもたらすかについて明らかにすることを目的とした。フォーカルグループの語りのデータを SCAT（Step for Coding and Theorization; 大谷, 2008; 2011）に準じて質的分析を行った。その結果，【描画アプリで絵を描く体験】【表現の特徴の発見】【自己への気づき】【日常生活における変化】【他者関係とコミュニティ】という 5 つのテーマが生成された。描画表現から自己の特徴を捉え，自己の感情理解につながること，観察の効果，内的世界の対象化により自己への気づきがなされた。ASD 者同士での相互作用により被受容感が生まれ，自助グループのような機能が生じたことが示唆された。

第Ⅴ部 総合考察

第 11 章　自閉スペクトラム症者の描画表現を通した内的世界の理解　本論文では，当初掲げた目的に対し，以下の知見を得たものと整理できる。また，仮説モデルをまとめると，Figure 1 のように示される。

目的①に対して　描画表現に関して，他者交流が増加するほど他者参照能力が高まり，自己理解が多様になる可能性がある（研究１）。「自己を生かす」という機能が生まれる（研究２）。

目的②に対して　描画表現を他者とともに検討することを通し，自己の肯定的要素が捉えられ，感情面の自己理解が促進される可能性がある（研究３・研究４・研究 5）。

目的③に対して　描画表現が介在することで，他者との相互作用が安心できる距離感の中で生まれ，他者の多様性や個別性を認めることを通して，他者参照や省察が生じ，他者とは異なる自己の特徴を理解する（研究６・研究７）。

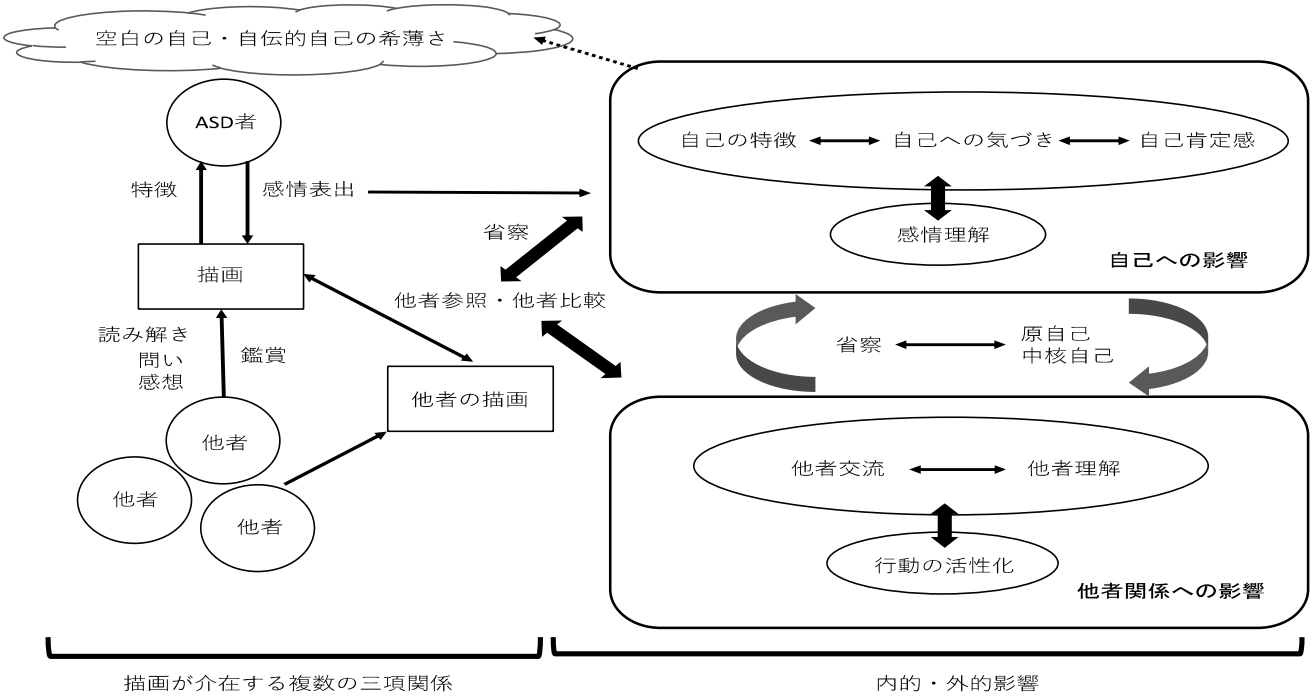

Figure 1　ASD 者の描画表現を通した自己理解と他者関係の仮説モデル

本研究の限界はあるものの，ASD 者の内的世界の理解を深める自己表現に着目した意義は大きい。今後も支援につながる自己理解と他者関係に関する事象を捉える研究の発展が求められる。